世の終りと死後の世界 ― 潜伏キリシタンの伝承『天地始之事』における聖書物語の受け止め(4)

梶田叡一
KAJITA,Eiichi

キーワード:潜伏キリシタン、世の終わり、死後の世界、終末思想、天地始之事

潜伏キリシタンに密かに伝えられた『天地始之事』について(注１)、引き続き、その内容を以下に紹介し、検討を加えてみたい(注２)。

本稿では『天地始之事』の最終部分、第５のテーマと第６のテーマについて見ておく。これらはいずれも短いものであり、それぞれ１つずつの物語となっている。

第５のテーマは「この世の終り」であり、

(16)この世の終わりと最後の審判について述べた物語、である。ここには３つのエピソードが含まれている。

そして第６のテーマは「死後の世界について」であり、

(17)死後の世界における罪の償いの火について述べた物語、である。ここに含まれるエピソードは１個のみである。この部分は、いわば付録のようなものであり、文体も異なっていて、後日の追加であろうと田北耕也は言う(注３)。

これらは、新約聖書の「ヨハネの黙示録」に述べられてきた物語の一部や、旧約聖書の表現の断片、カトリック教会の古い伝承、を下敷きにしていると思われるが、素朴であり簡素である。まず各物語ごとに検討してみることにしたい。

この世界がどのような経過をたどって終末を迎えるか、そこではこれまで亡くなった死者が全て蘇って出現し最後の審判を受けるがそれはどのような情景か、等が述べられる。

(65)この世界が滅亡する時、日照り、大風、大雨、虫の害など、さまざま異常なことが７年続く。食べ物は不足し、奪い合いなどの争いがひどくなる。その時に天狗(悪魔)がきてマサンの実を様々な形に変えて人々に食べさせ、自分の味方にしようとす

る。これを食べた人は天狗(悪魔)の手下になり、インヘルノ(地獄)に落ちることになる。この７年が終ると３年間の大豊年が来る。この時に悪を捨て、善を行うようになってほしい。人々にたすけを得させようとしてのことだからである。この３年が終ると、天の日と地の火が一つに合体し、海も陸も一面の大火となる。獣も鳥もあらゆる生き物が、人間に食べられて助かりたい、と叫ぶということである。
←このような「世の終り」の話は、同じような形では旧約聖書にも新約聖書にも見られない。新約聖書の「ヨハネの黙示録」では天の玉座に座すイエスの下で、次々と天使が現れてラッパを吹き合図をする中で、次々と不思議なことが生じる、といったドラマチックな形で多様な天変地異の話が描かれている。また、旧約聖書の「創世記」には７年の豊作の後の７年の凶作の話などがある。

(66)大火が治まった後、焼け跡は一面の白砂となり、サントウスがトロンの貝を吹くと、以前に亡くなった人も、世の終りの大火で亡くなった人も皆ここに出てくる。デウス（天帝）はアニマ（霊魂）をそれぞれ元の身体に蘇らせられる。しかし、この時に行き惑っているアニマ（霊魂）がある。それは火葬された者のアニマである。土葬や水葬された者、鳥や獣や魚に亡骸を食べ尽くされた者のアニマは大丈夫、元の身体に戻る。人間に食べられた者は元の身体にアニマが戻らない。だからミイラの薬は飲んではならないのである。
←こうした形での「死者の蘇り」の話は、旧約聖書にも新約聖書にも見当たらないが、西欧キリスト教世界では伝統的にそう信じられていたのではないだろうか。特に、火葬されたら「蘇り」の時に元の身体が無くなっているから、アニマが帰る所がなく宙をさまようことになる、といったことは宣教師から口伝えに教えられたことであろう。いずれにせよキリシタンの間では火葬は厳禁であったと言われる。なお現代においては、カトリックもプロテスタントも信徒の火葬を禁じてはいない。

(67)この時にデウス(天帝)は、大きな御威光御威勢をもって天下られ、道を踏み分けて御判(洗礼の印)のある者を御選びになり、右と左に別けられる。悲しいかな左の者はバウチスモ(洗礼)を授かっていないので天狗(悪魔)と共にベンボウ(地獄)に落ち、封印(洗礼)を授かっている右の者はデウス(天帝)の御供をして皆パライソ(天国)に入る。パライソ(天　国)で善の多い少ないを見分けられて、それぞれの位を与えられる。ここで

法体を受けて 仏となり、末世末代まで自由自在を得て、安楽な暮らしをすることになる。
←「最後の審判」の物語である。洗礼を受けたものだけが救われる、という話は、宣教師が繰り返し説いたところである。最後の方には「法体」とか「自由自在を得る」とか、禅宗など仏教各派が説いていた「死＝成仏」のイメージの影響も伺える。

【死後の世界における罪の償いの火の物語[物語17]】
　最後に「追加」されているのは、死後の世界における生前の罪の償いについての話である。罪の償いのための特別な冥土の火があって、その火で焼かれるとこの世での罪が滅却し、パライソ（天国）に行くことができる、というエピソードが語られる。これを、親友同士の２人を登場させることによって具体的な形で語る。

(68)親友同士の２人が居たが、互いに自分が先に死んだら死後の世界のことを相手に詳しく知らせる、という約束をしていた。そのうちに１人が亡くなったので残る１人は嘆き悲しみ、そして死んだ友達からの知らせを待った。ずっと何の知らせもなかったが、３年と３日目に死んだ友達が現れたので、とても喜び、「どうして遅かったのか」と尋くと、「片時も余裕がなかったんだ」と言う。よく見ると、顎の下に火がある。「どうしたんだ」と尋くと、「フルカトウリヤ(煉獄)の火なんだ」と言う。それを聞いて、「その火をくれたまえ、私の罪を焼いて滅ぼし、君と一緒にこの世を立ち去りたい」と言うと、「この火の熱さはこの世の火の10倍ある、絶えがたいほどだ」と言う。「それでも、ぜひ」と頼むと、「それなら」と言って、そのへんの枯れ木を集めて積み重ね、冥土の火をつけると、焔が盛んに燃え上がり、たちまちに身体が焼け失せ、すぐに天の道を得てパライソ(天国)の仲間に入れてもらうことができた。サントス様と申されるのは、この方のことである。もう１人の方の名前は分からないので略す。
←「煉獄の火」の物語である。同じように死後に苦しみを味わうところであっても地獄はそこに落ちた人が永遠に救われることのない世界であるが、煉獄は苦しみを受けることによって生前の罪の償いをし、最後には天国に行くことができる。1960年代初頭の第２バチカン公会議以降は、カトリック世界で煉獄が語られることはほとんど無くなったが、長年月の間、聖人やそれに近い人以外は、死んでから長短様々ではある

にせよ必ずこの煉獄で生前の罪を浄化した上で天国に入る、というのがカトリックの伝統的信仰であった。キリシタンが表の世界で活動できた時代においても、また潜伏を余儀なくされた時代においても、個々のキリシタンにとってこうした煉獄のことは大きな心理的重みを持っていたと思われる。潜伏キリシタンが大事に伝承してきた『天地始之事』の最後に追加されているのが煉獄に関する物語であったことは、彼らの信仰体系の中で煉獄のことが大きな重みを持っていたことを示すものであろう。

【潜伏キリシタンの死後の世界のイメージの特色】

以上に見てきた「この世の終わりと最後の審判」および「生前の罪の死後における償い」のイメージは、当時の日本の庶民の間に広がっていた「死後」についてのイメージとは大きな違いがある。

当時の日本の庶民は、誰もが地元のどの寺かに所属することになっており（寺請け）、「死後」の問題については基本的に仏教徒としてのイメージを持っていたと言ってよい。田北耕也の研究（注４）によれば、『天地始之事』を語り伝えてきたのは長崎県の西彼杵（そのぎ）半島の旧黒崎村（現在は西海市に属する）を中心とした地域の潜伏キリシタンであり、彼らの多くは禅宗の寺に、少数は浄土真宗の寺に属し、葬式の時にはその寺の僧侶に来てもらっていた（僧侶の読経と同時に別のところでそのお経の効力を無くすための祈りをするが）と言われる。この黒崎地区の潜伏キリシタン以外の人達は、どの宗派に属していようと、死をもって基本的には「仏になる」（成仏）ととらえ、「浄土に行く」「仏国土に行く」「涅槃の国に行く」と捉えていたようである。元々の仏教にあった、転生する（次の生に何かに生まれ変わる）ために待機する「中有」の世界に行く、といったイメージは、よほどの仏教学者や高僧の一部以外には無かったようである。このように一般の人と潜伏キリシタンとでは、死後の世界について根本的に異なったイメージを持っていたことになる。

潜伏キリシタンの場合には、人は身体だけでなくアニマ（霊魂）を持っており、死ぬのは身体だけ、と教えられている。そして死後の世界には、いわば２段階の「救い」が待っているとされるのである。まず人が死んだら、生前に洗礼を受けていた者のアニマだけがパライソ（天国）に行く道を準備され、洗礼を受けていない者のアニマはベンボウ(地獄)に落ちる。ただしパライソに行く場合でも生前の大小の罪の償いをフルカトウリヤ(煉獄)で火に焼かれておこない、その上でのこととなる。そして、

この世界はいつか終わりを迎えるが、その時には天国に行ってた人たちのアニマは再び身体を得て人として復活する。ただし、火葬された人と他の人に食べられた人のアニマは、戻るべき身体が無いので、復活できない。

こうした死後の在り方の想定は、潜伏キリシタンにとっては大きな重みを持つものであったに違いない。『天地始之事』が自分たちを取り巻く世界の全てがデウス（天帝）によって創られたものである、というところから始まり、個々人は洗礼さえ受けていればパライソ（天国）に行ける、そして世界の全てが終末を迎える時にはまた人間として復活できる、という希望ある物語で終わる、というのは、その意味でもよくまとまったものと言っていいであろう。

【『天地始之事』に見る自己自身と自己の日常生活の物語的意味づけ】

文化の基本的な機能は、その文化の下で生きる人たちに強固な共通の意味体系を準備することである。常住坐臥、自分の目にするもの行うところの全てが、何のためのものであり、どのような意味でそうなのかを、様々な物語的意味付けの体系として整理した形で与えてくれるものが文化である。宗教と呼ばれる文化領域は、そのことを典型的に示すものであろう。

吉本隆明が1968年に刊行し広く読まれた『共同幻想論』という本がある（注５）。社会は、そして国家は、それを構成する人たちが持つ共通の「幻想」によって結びつき、機能しているという基本視点が、ここでは提示されている。この「共同幻想」という言葉こそが、まさに一つの共同体を共通の意味付けの体系でもって結合させ、共同歩調をとらせ、統一的に機能させているものを的確に表現しているのではないだろうか。

この意味で興味深いのが、17世紀後半の公然とした宣教から百年の間に、地域によっては支配的な宗教となったキリシタン共同体、そして禁教下で細々とした形ながら長崎など特別な地域で２百余年続いた潜伏キリシタン共同体である。キリスト教という欧米的な「共同幻想」を、全く異質な「共同幻想」に生きている日本社会に持ち込んだ場合どうなるのか、という問題が具体的な形で試された事例と言ってよい。

『天地始之事』の検討からも、現代日本社会において我々が特に意識することなく自己自身と自己の生活の在り方に対して与えている意味付けの在り方を、意識化し吟味検討していくための手がかりが、様々な形で得られるのではないだろうか。

(注１)梶田叡一「潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』」奈良学園大学紀要 第３集， 2015年 9月，29～37.

梶田叡一「潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』(その２)」奈良学園大学紀要　第６集,2017年 3月，15～21.

(注２)この小論との関連でこれまで筆者が書いてきた主なものを以下に掲げておく。

梶田叡一「旧約聖書『創世記』の物語の日本での受容――潜伏キリシタンの伝承『天地始之事』」における聖書物語の受け止め」プール学院大学研究紀要 第58号，2018　年 1月，1～12.

梶田叡一「御主イエスの御誕生と成長について潜伏キリシタンは如何に語り伝えてきたか――『天地始之事』」における聖書物語の受け止め」エレノア(桃山学院教育大学) 第1号， 2019年 4月，5～16.

梶田叡一「御主イエスの御受難と栄光について潜伏キリシタンは如何に語り伝えてきたか――『天地始之事』」における聖書物語の受け止め」エレノア(桃山学院教育大学) 第2号， 2020年 3月，5～12.

梶田叡一「聖母マリア(御母マルヤ)の物語の日本での変容――『天地始之事』」における聖書物語の受け止め(３)」エレノア(桃山学院教育大学) 第3号， 2021年 3月，5～14.

(注３)田北耕也は岩波書店刊『キリシタン書・排邪書(日本思想大系25)』に収録の「天地始之事」の「頭注」において(P407)「底本にはここに題がなく、１行空となっている。後日の追加であることは文体にもあらわれている。」と述べる。

(注４)田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会、1954年。

(注５)吉本隆明『共同幻想論』河出書房新社、1968年。なお、改定新版が角川ソフィア文庫の１冊として、角川学芸出版から1982年に刊行されている。